

丸吉（まるきち）皆川家日誌に見る戊辰戦争下の仙台-商人が綴った幕末維新の記録-

著者	佐藤 大介
雑誌名	歴史講座「仙台藩と戊辰戦争150年」
発行年	2018-11-16
URL	http://hdl.handle.net/10097/00127879

丸吉（まるきち）皆川家日誌に見る戊辰戦争下の仙台
—商人が綴った幕末維新の記録—

佐藤大介（東北大学）

今日の講演

丸吉皆川家日誌は、江戸時代の仙台藩領における有力商人の一つであった、丸吉皆川家の当主が書き継いだ、約100年間に及ぶ記録である。

今回の講演では、「戊辰戦争150年」に関わらせて、主に慶応4年の記事を紹介しながら、仙台藩領の人々、特に庶民にとっての戊辰戦争の意味について、会場みなさんとともに考える。

1、丸吉皆川家と「日誌」

(1) 丸吉皆川家と「日誌」

①丸吉（まるきち）皆川家

・磐井郡藤沢町（岩手県一関市）の有力な商家の一つ

紅花・煙草（主に天保時代まで）、生糸、薬種を商う

＊江戸時代・磐井郡藤沢町の概要

○永代着座・奥山家（2000石）の居館が存在（元禄7年（1694）～）

○江戸時代、仙台藩の支配下磐井郡「東山」の拠点都市の一つ。

「藩政時代の藤沢駅は仙台と気仙方面を結ぶ宿駅として、又仙台藩北部の物資の集散地として三八の市日を中心に相当に殷賑を呈した。これは単に地理的關係のみでなく、駅内に皆川、橋本などの豪商があつて、古川以北の紅花、生糸煙草等を買集め、京阪地方に販売し、又彼地の産品を購ひ来たつて地方に商つた事に依ることが少くない」

（森嘉兵衛『岩手藤沢誌』1941年 仮名遣い・漢字は常用に改めた）

②「丸吉皆川家日誌」

・丸吉皆川家の当主が書き継いだ記録

I 天明～天保15年（1780年代～1844） 5代・久蔵（1780～1846）筆

約1100丁（頁）／22万字

II 嘉永6年（1853）～明治4年頃（1871） 6代・喜平治（1895～1874）

約900丁／？字 ＊慶応3年秋～明治3年分 約12万字

＊正式な標題 原本の表紙に標題が記されているが摩耗して読めず

③これまでの利用

「幕末の記録をたづねて」（1936年 及川孝一） 記事の紹介

『藤沢町史』、『日本地震史料』 部分的に利用。

＊『日本地震史料』天保・安政の地震記事 「岩手県立図書館蔵」とされている。

④原本調査の経緯

- ・2015年9月 岩手県立図書館での調査。
「皆川家日誌」として①のコピーを確認／②は不明。
- ・2015年12月 ①のコピーを解読開始（～2016年12月）
＊「青葉山古文書の会」（鶴飼幸子・熊谷新一・志田清一・後藤三夫・佐藤）
- ・2016年5月 岩手県一関市での史料保全普及講座 情報提供呼びかけ。
- ・2016年6月 所蔵者が災害研に来訪。調査をお願いして快諾を得る。
- ・2016年9月 原本の撮影 ②の原本／①の脱落部分 など
- ・2017年9月～ ②の解読開始（慶応4年分から）
＊原本 10月26日～12月9日 仙台市博物館「戊辰戦争百五十年」で展示中

◎講演者が考える「丸吉皆川家日誌」の史料価値

その膨大な記事は、仙台藩の歴史はもちろん、江戸時代後期の日本列島の政治・社会・経済の動き、天変地異と人々の関わりについて、これまで未知の内容を多く含む。江戸時代の基本史料として広く共有すべき史料である。

（2）戊辰戦争―研究の状況

①戊辰戦争とは

・「一八六八年（慶応四年・明治元年）正月三日に京都南の鳥羽・伏見で戦争が勃発し、翌一八六九年（明治二年）五月十八日に五稜郭が開城して箱館戦争が終結するまでのほぼ一年半、五一八日間にわたって展開された国内戦争である」（奈倉他 2018）

②研究状況（奈倉他 2018）

- ・「欧米列強注視の下、この内戦を通じて、京都新政府が自らを全国権力となし得たにもかかわらず、内戦下での政治・社会・生活・思想のあらゆる文化での変化に対する具体的解明は不十分であった」
- ・「近代兵器」を駆使し、相手方を「賊」と規定して戦われたこの激しい内戦が、社会と人間の深部に刻印した影響は計り知れないものがあったはずである」

丸吉皆川家当主・喜平治 当時73歳

戊辰戦争下の藤沢・仙台藩をどのように見つめたか。

→鳥羽伏見の戦いから、戊辰戦争後の処分に至る時期の主要な記事を紹介する

＊戊辰・東北関係の流れ（別表）

2、「三百年来の大乱」へ―慶応四年一月～四月

（1）鳥羽・伏見戦後の仙台藩

○鳥羽・伏見の戦いと奥羽諸藩

- ・鳥羽・伏見の戦での旧幕府軍の敗北の情報が入り始めるのと同時に、仙台藩の対応や、重臣層の動向に関する情報を得て、記録している。
- ・慶応四年一月末 仙台藩、会津藩・上ノ山藩から『御加勢』を依頼されるとの情報
その後、鳥羽伏見の敗報を受け、会津藩の使者は『涙を流』して帰国

仙台藩の選択を注視する喜平治

「徳川公が『朝敵』とされ、『官軍』が御発向されるにおよんでは、御手前様（仙台藩／伊達慶邦）も徳川家への御加勢はなされまいが、どのような御評議となるかは知らない」

(2) 伊達慶邦の評判・仙台藩への視線

①「よろしき殿様」—嘉永七年(1854)十一月 黒船再来航時の風聞

「この節の江戸表での評判では、仙台様【伊達慶邦】、鍋嶋様【鍋島直正・佐賀】、細川様【細川慶順(のち韶邦)・熊本】、大いによろしいとの噂である」

②「将軍職を決める仙台藩」—慶応三年九月下旬の噂

「いま、将軍様【徳川慶喜】は京・大阪におられるが、江戸へのお下りはなされがたい。
「本将軍」の御位にはなられていない。御三家【尾張・水戸・紀伊】と、加州【加賀前田家】、薩州【薩摩島津家】、仙台様【伊達家】御三方の御連印がなければ、(征夷)大將軍の御位にはなれないというが、それがないため未だに大將軍の位にはなれないという。そこで自分で将軍と名乗っている由である」

仙台藩主 徳川御三家、加賀前田家、薩摩島津家と共に、征夷大將軍を決める立場
史実ではない／この時期の仙台藩および藩主への政治的力量への注目

③「奥羽の旗頭」—慶応四年二月廿七日の情報(大意)

- ・新政府から仙台藩に対する会津征伐、奥羽諸藩への徳川家征伐の指示、奥羽諸藩が仙台に使者を遣わし、仙台を「御旗頭」として諸事従いたい、としているらしい。
- ・仙台藩では、「大條様」(大條孫三郎 伊達慶邦の建白書を持ち上洛中)の帰国を待っている。
- ・会津様は、「上方戦」(鳥羽・伏見)にて一万人を失い、仙台の相手にはならないので、兵糧の無心や、征伐の回避を願う使者を何度も送っていた。
- ・「江戸一橋将軍様」からも使者が来ており、屋形様(慶邦)や御一統様は迷惑している。京都から「(錦の)御簾」と大條様が下って、様子次第では御和談にもなろう。

新政府に従う奥羽諸藩と、会津・徳川将軍家から頼りにされる

*「奥羽の旗頭」としての仙台藩(栗原2018) 鎮守府将軍(藤原秀衡)

(3) 奥羽鎮撫総督軍と仙台藩の会津出兵

① 3月23日 奥羽鎮撫総督軍、仙台城下へ 養賢堂に駐屯

鎮撫総督・九条道孝 副総督・沢為量 参謀・醍醐忠敬

下参謀 世良修蔵(長州) 大山格之助(薩摩) 薩摩・長州・福岡藩兵

② 4月11日 鎮撫総督軍、仙台より岩沼へ

○ひるがえる錦旗と軍勢

- ・「錦の御旗は、日の丸だという。金銀にて縫い付け、御立ち也」
- ・「御簾は、日に詠みて光り輝き、ほんとうに尊い御簾である。右の二日間の御発駕の御行粧は、皆の目を驚かせた。まことに見事な拝見物である。一体の惣人数は、およそ七万人の御人数と話している」

錦の御旗の美しさと、大人数の軍勢(仙台藩兵)への高揚感

*「長州の家人」の評判

「九條様へ御つきそいの士、長州の家人に、まことに『^(博学)白学多才』の賢人が一人いる。諸事はこのものが指図し、御手前(仙台藩)の御陣方へ、いろいろと添心される。よく万事をとりはかる『仁物』の義は□軽得、実事がよろしき人と諸人で噂している。九條様も、まことに結構な御方だと申している。仙台の御吟味□諸事を御任せし、拒むことなどもない」

④仙台・会津で開戦の一報（＊4月19日土湯口の戦い→4月29日頃）

「会津征伐は、ついに和談とはならず、御人数【軍勢】を繰り出し、四月十九日午の刻より巳の刻まで戦争するという。その絵図面と、御行列御人数の御名付【名簿】が来た」

戦の10日後 磐井郡藤沢町に「絵図面・御名付」が流布 それを写す喜平治
仙台藩領にも、逐一戦地の情報が入ってくる。

＊いくさの装束

「近年のいくさ装束は、むかしと違って甲は用いず、陳笠に、縫い詰め、鉄砲という。着込にクサリを入れ、またはから金【真鍮】や銭を縫い付け、中形などの如く、真綿を入れ、上は羽二重にて仕立て、その上着は半切を着用して、陣羽折は様々、仙台印に黒の五分という唐切にて廻りに付ける。みな月の印を付ける。右の品、仙台の店々で売り切れとなり、外より買い集め、物々片ヨリにて売る由である」

「この節、古風の支度は、松山の茂庭様と外に一人だけが日本風のご装束であり、かえって大いによろしく見える」

仙台藩および給人領主に西洋式軍備が普及している

＊戦争への恐れ

「いくさのことは『絵本』でだけ見ていた。ところが近年は西国から上方、そして奥州で始まる。この節、先陣が伊達桑折【福島県桑折町】まで出て、合戦になったと申し来た。恐ろしいことになった。段々『三百年來の乱』となっている」

『絵本』 軍記物語（『平家物語』『太平記』など）・軍談（『絵本太閤記』など）か
喜平治にとって戦争は「過去のお話」 三百年間続いた平和の終わり
戦乱の世の再来 強い恐怖感

3 「薩長の謀計」か—慶応四年閏四月～五月

（1）奥羽列藩同盟の結成

○奥羽越列藩同盟の結成 閏4月11日 会津藩の謝罪・歎願を周旋
・丸吉皆川家日誌 直接の記載なし

様々な情報

- ・「会津の御征伐も、遠巻にして、すでに総攻撃になるところ、差し控えの陣触があり
どういうわけか、段々お引き取りとなった」（閏四月中旬）
- ・「いくさの次第は、『色々様々の■噂』があり、よく分からない。存外に長い陣とな
って いる。米沢上杉様が「和□【談】」をお取り扱いになっているという」（同上）
- ・「九條様が（江戸幕府領だった）伊達の御代官から大金を受け取り、官料の代官に命
じたので、同地の百姓たちが不服におもい一揆を起こした。屋形様【伊達慶邦】は立
腹し、また他の三将【九條、沢、世良】もよろしからぬ事があったとして京に達して
追い払った。九條様は以前のように仙台の養賢堂に入られようとしたが、屋形様はそ
こでは戦評定があるといって御断りになり、九條様は岩沼に御戻りになった」

会津の処遇をめぐる仙台・米沢と新政府側との対立

仙台では会津攻めの中止 伊達慶邦と総督府との対立として伝わる

（2）「会津攻めは薩・長の謀略である」—様々な噂

- ①「薩長の謀計」 薩・長は仙台を奪い取るため、但木公・三好公を語らい、九条様らを仙台に下向させた。それを、京都から帰ってきた御曹司様と大條様が、京都での謀計を見抜いて会津攻めを止めさせた。この頃、鍋島勢が船で松島に上陸したのも仙台落城を見計らったのである。(五月上旬)
- ②長州様、薩州様は「何かと威張って色々謀計」。徳川家の「根を断ち根をからし」、後に「大將軍」になろうという「下地」か。南部へは、八戸様が薩州より入られる方(南部信順／島津重豪の子)で、「大南部様」(盛岡藩)に御談合し、「仙府の透(すき)」をうかがっている由。一関では磐井川の長橋を撤去し、川下でせき止める用意をしている。(五月下旬)
- ③岩沼陣にて、九条様は実は「三男」であること、このたびの会津征伐は、薩州、長州、筑州などが「朝帝」を拵え、勅命として自分たちを下したと「実事に落とされ候」。よって(会津)御征伐を止め引き返した。敵は味方、味方が敵となる。関東近国より西方は敵、東方は味方。ただし南部だけは油断ならないという(五月下旬)
- ④屋形様と上杉様は九条様から実事を知らされ、直々に薩長の「謀上」瀬良【世良】修蔵と言う者が白河【福島県白河市】にいたのを、八丁目駅【福島県福島市】より御小人を二人廻して捕らえ、詮議の上切らせた。修蔵の持ち物には「征伐の巻」ほか「謀計・偽の事、御国方の諸士連判一味の口名前書」が委細にあった(五月下旬)。

風説「会津攻めは薩長の謀略。仙台藩が出兵しているすきに佐賀・盛岡勢が仙台を狙う」
「九條様は偽物」

「首謀者は世良修蔵」→ 殺害

* 世良 閏四月二〇日 福島宿にて捕縛・斬殺

丸吉皆川家日誌の記載 殺害場所が誤っているが状況はおおむね符合

(3) 仙台藩、立つ一会津・庄内・徳川宗家との関係に関する風聞

○慶応4年6月初めの情報

- ・庄内より20万両、会津より2万両、徳川家より70万両と兵器の支援を受けた、との噂
- ・涙ながらに藩存続への支援を訴える「酒井若殿様」(忠篤、15歳)に、「貴公は御年の大名、さような涙に及ばぬもの、花咲く節も有る、御案じめさるな」と励ます慶邦。

喜平治「屋形様の御仁勢・御威光弥増しなり」と評価

「何様大平成るところ、万民の□□願うところなり」

* 東国の旗手として、太平の世を回復させる仙台藩という期待

4 「軍談」と「不天気」―慶応四年六月～九月

(1) 様々な風聞

① 6月初旬 『軍話(いくさばなし)』禁令

・「毎日毎日『軍話』が止まない。次に不天気の話が専らである。『上々様方』が揉み合い乱となれば、下々も同様である。それが天に通じて天気が定まらず、乱同様となる。御城下表では軍咄を停止する御触が出る」

・「いくさばなしを厳しく差し留める御触が出る。この節、角力と芝居が許可され、勝つまで興業は御構いなし、という触れである」

1868年(慶応4・明治元年)は冷夏 翌明治2年と続けて凶作

* 六月六日～七日 大雨 北上川が大洪水 流域に大きな被害

「戦争による世の中の乱れが、天に通じて、天候が悪化する」

仙台藩 庶民による戦争の話題を禁じる 代わりに「勝つまで」相撲・芸能興業許可

⑤天候不順と「今上皇孫」

「連日の不天気は普通でなく、いよいよ不作となる模様である。まことにこの乱世には、特に下々の難義となり、当惑している。『上々様御政事』が崩れ、国々の諸侯が立ち上がって乱となり、下々では金銭が崩れて乱になり、そうなれば天気も乱となる道理だと見受けられる。『古の乱世』の時よりこのたびは戦は少しだとはいえ、一体国々が事多く乱れるのは、『古』よりも乱れているように見える。『当世の今上皇孫』はまだ御幼年であり、また御即位の事が[]なのでよく治まらないのだろうか」

諸侯の間での戦争 経済的な混乱（戦乱／開港後の混乱）

天気の乱れをもたらすとの認識

*「古の乱世」 源平合戦 養和の飢饉（一一八一）

応仁の乱 長祿・寛正の飢饉（一四五九～六一） と重ねて現状認識

・「今上皇孫」（明治天皇）

幼年・きちんと即位していない 天を鎮められない 役割が果たせない（批判？）

（２）庶民の負担

①四月十九日 磐井郡藤沢町「組拔衆」の動員・御用金賦課

「今日、当所の『組拔衆中、御出入司御支配の分』三人が、（丸吉皆川家の）本家ともに仙台に出立した。『御郡奉行様御支配』へはまだ御日指がない。しかし、『組拔』は常々よろしいといって、それになったら、この節『何もイヤ成る事』と大いに後悔している。もっとも大いに金も入用となり、手前（皆川喜平治）は、その頃大いに進められたけれども、『組拔』にはならず、よってこの節はいくさ場へ御召し遣われることもなく、一方の安心である。しかしながら、このような乱世、いくさとなつては、百姓たちも多く諸人足（に遣われ）、この年は御用金も三方四方より御無心があり、御用に はなはだ困り、難渋している。追々、だんだん百姓たちが難義に及ぶ時節である」

・「組拔」 軽格の仙台藩士 ここでは献金によって身分を獲得した農民・商人の家々

藩士として仙台城などを警護する義務 → 戦争が起これば戦地へ動員される

喜平治 強く勧められたが断ったおかげで戦争に行かなくていい、と安堵

→戦争や軍役は忌避する

ただし、御用金の負担が重くのしかかっている

②五月十一日頃 仙台藩領南部の状況について

・「（仙台）御城下より南の御郡の道中筋や、伊達郡口駅場では人足千人・千疋の馬を備えても、いくさが止まず、本当に難義し、迷惑して、目も当てられぬという。当年は関 国より奥羽のいくさ、乱世騒ぎで百姓は難儀している。当分奥郡、当郡などはいささかも 楽に暮らしている」

③六月下旬 魚の値上がり

「沖合に軍船多く、漁に出られず、また漁獲を軍人に奪われるため」

④七月一日 山立獵師２名（戦地へ）出立

⑤七月中旬 御領内にて金・銀・地金・女どものかんざし、金具などを藩が買い上げ、からかね【真鍮】の火鉢など無用の品、寺院釣り鐘、吟味のうえ指し上せるよう仰せ渡される

⑥七月中旬 東山の人々の動員

・農兵 七月一九日「東山にて式三百人・・・甚だ迷惑のこと」

藤沢町 次男・三男にて五人 八月上旬 千厩での農兵訓練

・「無判の獵師共」六・七人

＊ 8月中旬「東山獵師ども先分百人組御暇くだされ無事に帰る」

「仙台之陣中ハ〔 〕丈夫に下され、酒共に度々下され、御飯は望次第、四度ずつ給ると申す」

⑦八月上旬 戦争に伴う流通の途絶 物価の騰貴

「当国方は軍事に付、道中の交通が通ぜず、海からも陸からも物資の移入が不足して高直になっている」

⑧九月十四日 東山大肝入など仙台藩「奥郡」大肝入、仙台城にて屋形様に拝謁。

・ごちそうを受けた後、「軍事」その他に入用のため金10万両の御借上を命じられる。
下宿後、生糸にて納入する旨を返答して御暇を受ける。

喜平治の述懐

「奥方（仙台藩奥郡）では誠に静かに暮している。大いに静かである。御貸上などの諸上納に苦しんでいても、南のいくさ場の近村へ比べればいたって心やすい。『大家』も漬され痛み入ることはいいようもない。大肝入衆中も、大いに勘弁して御下りなり」

→戦場となるよりは、お金で済むならば良い、と自分に繰り返し言い聞かせる喜平治

5 「誠の軍人」と「働かぬ諸将」—慶応四年六月～九月

(1)「奥羽の大將」

○6月上旬 上野戦争（5月15～6日）の情報

・「この節、薩摩勢が所々乱妨荒らして、諸国では困り難義する」ので、「江戸方では『奥羽の大將仙台様』が早く攻め登るようにこいねがっているという」

(2) 軍制の違い 七月上旬

「いくさも、前々はこの方の敗軍が多い。それは、西国方の鉄炮は『壱筒に三放シ四放』と打ち、もっとも『皆替えず筒』が多い。仙台はいくさに馴れず、『一通の炮発』で、もっとも二十日や三十日で（隊を）入れ替えるので、勝利が少い。このほどは、替り番をしないように仰せ渡される」

装備の違い

＊「細野や□□夫（細谷十太夫）という御士」の「御法れい」を用いる。

(3) 藤沢領主・奥山家の戦い

＊奥山家 永之進清晴 会津出兵から手勢20人・不断組一小隊で従軍

○8月上旬 相馬（福島県相馬市）での戦闘の情報（8月1～2日黒木の戦いか）

・奥山家の若旦那様（栄之進 26歳）が銃撃で負傷

・奥山家家中・千葉東太夫の子息17歳が銃撃で即死。13日にその知らせが元結いとともに藤沢に届き、14日に葬儀「痛み入り候」。

＊藤沢町にて「出陣登り御家中ならびそのほか共」への餞別、「所つなぎ」、「無事安全に帰宅所願御祈祷、夜籠り、通夜、色々様々ナリ、何れ一統痛み候」

(4) 仙台藩兵の戦い その評判

① 七月下旬 「誠の軍人」は、「細谷、富田様、芝田の御家督、鮎貝様」

富田 富田小五郎か 七月一日平潟の戦いで奮戦

芝田の御家督 芝多賛三郎 加美郡谷地森

鮎貝太郎平 *芝多家 蟹湯事件で柴田郡村田からへ減封 汚名返上へ
本吉郡松崎領主 簀巻峠での戦いでの奮戦

②七月下旬

「仙藩諸将、諸士方は働かない。よく働く人が少ない。細谷十太夫という人は、敵方にて『細からず』と唱えて恐れられている由・(中略)・関東御旗本で当方へ加勢の人々は『仁義組』と行っているが、仙藩勢が働かず(いくさ)『へたなる』を笑っている」

③九月三日頃の記事 「四方の大敵にて、御当家大難の御時節なり」

6 いくさに破れて—慶応四年九月～十月

(1) 悪化する戦局—奥羽越列藩同盟諸藩の仙台収容

① 8月下旬 「御家中熊谷逸見旦方の日記」による戦況と仙台城下町の状況

- i 「岩城【平藩】五万石の安藤対馬守様は、七月十四日官軍のために落城して仙府へ御入り。泉の本田能登守様二万石も同じく落城して仙府へ御入り。下手渡一万石立花出雲守様は官軍へ一味のため安藤様に落される。三春五万石の秋田安房守様はいまだ落ちずという。棚倉の阿部豊後守様十万石は七月二十五日落城。二本松様も御家内が仙府に御入り。湯長谷の内藤長寿丸様は七月廿七日に官軍に落とされ仙府にお入り。織田兵部少輔様【天童藩】は早々に官軍が落城させ仙府にお入り、このごろ本所へ戻られる。三春と相馬の戦いでは内通や裏切りでそれぞれ大敗軍となり死者や怪我人が多く、百五十人ほど出た、とある」
- ii 「いま、仙府に御入の御大小名方があり、大屋敷や寺々で御入替明渡し御用立て、御貸屋敷になる。町方の大家へは御上より当座の御宿が仰せ付けられ、(大町)一丁目の日野屋【中井新三郎：近江商人】などは大取込となり、米などを渡されても、一日三〇両ほどは掛かるという。他の商家でも同じ。御賄い方を仰せ付けられ、所々の使者など宿屋になる」

新政府軍により次々と落城する奥羽越列藩同盟諸藩の城

敗残兵 仙台城下町で収容 「大屋敷」(家中屋敷か)、寺院

「町方大家」 日野屋＝中井新三郎(近江商人・中井家仙台支店か)

→同盟主としての仙台藩の役割

②九月六日頃 「近国の御諸士、落ウ人、大凡三万人ほど」

③九月十五日頃の情報 郡方へ人数割付け・仙台城下町の情報

- ・「御他領御客人・落人の御調で七千二百人ほど・達者で御用に立つ分はそれぞれ『御遣いとなりになり、老弱女子などは御郡方へ割付ける」
- ・「御城下も別国の如し、異国人風俗の人ばかり多し」(→各藩兵の洋式軍服?)

④九月十八日

- ・「所々落人、御城下おおよそ一万六千人ほど御調にて、奥方へ御割合になる」
- ・「当郡へは越後の長岡家中の由、同所の殿様は牧野備前守様、七万四千石」

磐井郡東山南方21か村へは180人

同年十一月二二日 長岡藩士、全員国元へ帰る(長岡藩再興許可)

○長岡藩士の語り

- ・「この御方【長岡藩士】は、御主人様より米拾俵・金拾両が下されると話したという。殿様が御本国に御入りになれば、御城【長岡城】や御城下の町家の普請となり、町家の百姓へも右の通り金と米を下されるという。全体、御金持にて廿万両を、『御立拔』のときに堀の中へ入れて隠し置いており、それで再建するとの事である」

＊逸話「米百俵」との関係

(2) 仙台藩の降伏をめぐって

○仙台藩 9月15日降伏申し入れ

12月7日 伊達慶邦、宗敦、東京にて謹慎／家名存続・28万石下賜

12月12日 伊達亀三郎を当主とする新封仙台藩の成立

①伊達慶邦の謹慎

- ・「丸吉皆川家日誌」十月初旬 八月の宇和島藩あて慶邦の官位剥奪の勅書を写す
- ・10月3日付の触れ 伊達慶邦の亀岡御殿謹慎の触れを見る
「御上【新政府？】には、御城中の御宝物や武具など全てをどこかへ御取り移し、空城にしてから屋形様を御移し遊ばされた」
- ・11月始め 仙台藩降伏の文書、重臣への処分などを記載

伊達慶邦の動向に関する風聞

「御国方、これまでのいくさに御勝利がないと、諸将のなかに謀反や、敵方へ内通する人が五・六人、外口口とも少なからずあるため、全くの御勝利がなく、敗軍が多く、このようになってしまった。屋形様【伊達慶邦】もそれゆえ大いに御苦痛あそばされ、いまは御老耄の体になってしまい、御隠居あそばされたのは、ごもつもの御事である」

- ＊「仙台藩的『背後からの一突き』（WW1後のドイツ）」論 皆川喜平治も納得する
仙台領自体は戦場にならず 重臣・家臣団への批判（→明治以後の評価へ？）

②10月初め 仙台城下町の情報一戦争継続

・「前に移したように【伊達慶邦謹慎など】、御城下表では一旦は『落城の体』に見え、下々の諸人も嘆き騒いだが全く取りしまいに至ったというが、全くそうではなかった。異人であるフランス、イギリスなどの諸将は、徳川家と仙台侯は、国の人々も『誠に仁義の国風』だと『賞翫』し、何とぞ味方になって『両国』を建てたいという相談があったく一万人の勢力だともいう。ことに、御国方には『赤組』と称するさむらい達がおよそ千二百人ほど、ほかにもよく調練された組があつて、合戦を好み、「今後は敵が何人いようとも恐れず」と、既に進軍しているという。ほかにもあるところの徳川家の人数が六千人ほど味方になるという」

＊9月3日、榎本武揚と土方歳三、仙台城にて戦争の継続を訴える。

元・江戸幕府の軍事顧問だったフランス軍人・ブリュネも同行

＊9月15日 額兵隊、養賢堂から出陣し石巻へ（赤い軍服を着ている）

→これらと関わる風聞か。

○「和談」について

- ・「細川様【細川韶邦】と伊達遠江様【伊達宗城：宇和島か】が御和談として、いくさは控えるようななどの吟味があつた。四条様【隆謨：仙台征討総督】もいくさを鎮めるかたがた仙台の様子を見に来た」

(3) 戦いは終わらず

①戦争の継続を望む人々（仙台藩士）

- ・「仙府の御諸士は、七分通りは合戦を好み、三分通りは好まずという。追々どうなるか」（慶応四年十月中頃）
- ・「この頃も徳川勢へ一万五千俵遣わされたという。官軍がこれを見て、どこに遣わす米か、と問うた。「徳川家から預かっていた米を渡し遣わしたのだ」とお答えだという」（同上）

②戦場、北へ一十月中頃 蝦夷地へ向かった人々

i 「江戸の御旗本勢が数百人。これも官軍へ隠れ、石巻より遠島【牡鹿郡女川付近】のほうにいる。江戸勢の大將は春日左衛門といい、いくさを七〇回戦ったという強い将である。仙藩では細屋十太夫という人は官軍も恐れるという。三七度戦っているという。この二人は、数度のいくさでは手勢五・六人ほどのほかは損害がないという。細屋は手勢が二百五六十人ほどあり、『大丈夫の人』である。数年諸国を回って諸事にくわしい。フランス人の中には『西国』へは鉄砲も薬【弾薬か】も売らず、これらと人数一万人を添えて仙台に味方するというが、御和睦となった上はいくさは止めとなる。しかし、京都から

どんな御勅命がくるか、おとがめは計りがたいという」

* 春日左衛門（1846～68） 彰義隊頭取並 箱館戦争にて自決

ii 「徳川勢が、石巻から気仙沼へ着船する。七百人程。このうちには当方の士【仙台藩士】もあるという。（気仙沼の）市中へやってきて飯を望む。家々では飯を握りにして指し出し、船中にも入れる。三日ほど滞留し、南部にて津軽を責め打つと聞くので、同所へ加勢に向かう由のお話しのところ、（代金）諸払いを立てて出立する。船はどこに行ったのか分からないが、『格別の損痛』にはならなかったという。御城下はまず『静謐』となった由である」（十月十二日）

* 榎本艦隊の石巻・折浜脱出 十月十六日 関連する動きか

7 国破れて一明治二年

(1) 仙台藩への処分

○仙台藩の減知 明治二年一月十九日

- ・表高六二万石から実高二八万石（実高百万石以上／4分の1）へ減知
- ・伊達家の家督 伊達亀三郎（宗基）が相続

喜平治 明治二年一月二〇日頃 領地の明細・亀三郎家督の書付を写す

「誠に是非なき次第、嘆かわしき御事ニ候」

(2) さむらい達の処遇

①藤澤の領主・奥山家の処遇

・「当家中へも仰せ渡される、御注進によって、御家中一統へ暇を下されると仰せ渡されたのこと。みな『離散、ちりぢり』となり、にわかには立ち退くことになり、迷惑・難義していることである」（一月中旬）

・「（奥山家の）惣御家中へは、みな御暇を下される。もし『所存』のあるものは御城下へ登って御主人様を助け上げ御世話・御奉公すべき由である。みなちりぢりとなって

痛ましい頃である。百姓【身分】になるべきという倍臣一統は、『品替り百姓』としての御取扱いとなる由。よって諸方は田畑を好んで求める手配である。南方では荒地などを下されるという」（三月中旬）

②「組拔」への処遇

- ・「百姓前へ下されていた知行は、昨十九日書き上げ候ところ、これまた（さむらい達と）同様に御召し上げになる・・・当村【藤沢】では、自分＜御知行高一貫五百廿文：一五石＞をはじめ、本家の宮三郎は組抜にて大高なり＜貳貫五百文の内持高あり＞、しかしいずれの家でも同様。去年いただいた御知行などは、狐に引かれたようなものだ。・・・本家の宮三郎は、追々困窮していった」（一月中旬）

仙台藩の処分 御用金の対価だった土地を全て失った藤沢・仙台の地方商人たち
喜平治の嘆き

「いくさでは金を遣い、御知行だけだったが、これを召し上げられて何もなくなり、一軒屋敷【居宅】のみとなって立ち続かない。自分を始め、親類どももみな困窮になり、ほんとうに難義に及んでいる。この我が身も七十四歳になった。六十三・四歳から病気がちで数年床中に隠れおり、『無類の乱世』に逢い、心痛のみ。長生きはまことに無用である。生き過ぎた」

「後世、『組抜』などはまことに『無用の立身』であって『夢の如く』なり」（献金させられた上、従軍させられて戦死し、さらに知行まで召し上げられた人もいる）

（3）藩領の引き渡し

①明治二年五月一五日 磐井郡の旧仙台藩領、引き渡しに際して 喜平治の述懐

「伊達家は三百年來の御大家、その百万石の御領地がこのたび召し上げられる。屋形様を始め、上の皆様はどうなられてしまったのか。すでに『御つぶれ』になさせられる次第、まことに痛ましいありさまは、申すばかりなく、下々までなげかわしく思う」

（4）仙台城下町の変容

①国分町の変化 明治二年三月

- ・「国分町へ、商売女が御免になる。宿屋中は『大盛繁昌』している。それゆえ、塩釜の女共が引き上げられ、同所は至って『不盛』となり、『衰微の姿』になる」

*江戸時代の仙台城下町 商売女は禁制 塩竈に遊郭があった

②さむらい達、仙台城下町を去るにあたって

- ・「御城下は至って不景気。『御大家』の御屋敷や、ほかの屋敷屋敷からこの頃出る品は、家具はもちろんけっこうな小袖が多く出ているが買い尽くしがたく、買う人がいなくなって安値になっても買いようがない」（明治2年10月）
- ・「仙台表の御屋敷方は『大崩れ』となり、大屋敷、小屋敷とも、もよりもよりにて御払に成し下されるのが諸方である。諸家材道具が売り払いになり、町家では別して市日の事になる。北は二日町、南は穀町・材木丁あたり、両所へ市日が立ち、諸品の出見世が張り出し、諸商人が大に入り込んで取引し、値段の高下もさまざまである。諸道具、絹布類は下値である」

仙台城下町 面積の多くを占めていた武家屋敷の「解体」

家財道具、小袖類、さらには屋敷自体も払い下げられる

*「杜の都」 武家屋敷の庭自体は残存

(5) それでも生きてゆく人々

- ①明治三年二月十日 磐井郡千厩（一関市千厩町）での「にわか祭り」「組合祭り」
「十日初午、千厩町へ当る、よって火鎮のにわか祭り、御みこしが秋葉山権現の御祭へ
巡行する。屋台や仕掛祭が一五・六もでてにぎにぎしい。思いの外結構な祭で、小踊
などもある。三日程にぎわう。こんな節柄だから、組合祭である」

おわりに

1、丸吉皆川喜平治にとっての戊辰戦争

- 種々の情報収集 自分の家・地域・「国」（仙台藩）はどうなるのか
戦争への忌避感 → 戦争で犠牲になるのは庶民
- 仙台藩・藩主に対する信頼感 藩の枠組みを前提とした生活 その解体を嘆く
「母国」としての仙台藩への愛着 「大国」としてのとらえ方
それが消滅することの心痛 具体的な損害 → 藩士たちへの批判

明治時代の仙台・宮城人の自己認識の形成にどのようにつながっていったか

2、各種情報の意義

- 幕末期の仙台藩 未見・初出の情報を多数
 - ・「正確性」を十分精査する必要 ほぼ正確／大枠はあっている／虚説
 - ただし「正確か否か」にとどまらない価値
- *「風説留の世界」（宮地1998）
 - ・江戸時代後期 身分・地域を越え政治・社会情報の交換
 - ペリー来航を機に活性化 ジャーナリズムの端緒 「輿論（世論）」の形成
 - 幕末の政局を規定
 - *仙台藩 領内の人々・領外のに注視されつつ戊辰戦争を戦っていた

- 「丸吉皆川家日誌」
 - ・江戸時代後半の仙台藩領における情報環境・言論状況を記録
 - ・一つの出来事に関して情報収集を重ねて精度を上げようとする態度
 - 「虚説」「噂」「風聞」の書き分け

多種多様な情報が乱れ飛ぶ現代 その見極めがあらゆる場面で重要に

- *「ポスト真実（Post Truth）」 「フェイクニュース」の問題
- 幕末維新期の庶民の情報環境 人々の情報への向き合い方を研究する意義

（参考文献）

- ・『仙台市史』通史編6近代1（仙台市 2008年）
- ・宮地正人『幕末維新期の社会的政治史研究』（岩波書店 1998年）
- ・木村紀夫『仙台藩の戊辰戦争 先人たちの戦いと維新の人物録』（南北社 2015年）
- ・奈倉哲三・保谷徹・箱石大編『戊辰戦争の新視点』上・下（吉川弘文館 2018年）

(別表) 戊辰戦争関連略年表 (『仙台市史』通史編6 近代1 より)

慶応3年	1867年10月14日	将軍徳川慶喜、大政奉還を上表
	12月9日	王政復古の大号令
慶応4年	1868年1月3日	鳥羽・伏見の戦い
	2月15日	伊達慶邦、奥羽の有力五大名に同心協力を要請
	3月23日	新政府の奥羽鎮撫軍、仙台に入る
	4月11日	仙台藩、鎮撫総督の命に応じて白石出兵 江戸開城
	閏4月1日	関(宮城県七ヶ宿町)で仙台・米沢・会津三藩の家臣が会合
	閏4月11日	白石で奥羽十四藩の家臣が会合(奥羽越列藩同盟)
	閏4月20日	鎮撫軍下参謀・世良修蔵討たれる。 会津藩、白河城を攻略
	5月1日	政府軍、白河城を奪回
	5月上旬	奥羽越列藩同盟なる
	5月18日	鎮撫総督九条道孝ら、仙台を發ち秋田へ向かう
	6月	奥羽北越同盟軍政総督府「討薩の檄文」を發する
	6月16日	政府軍、平潟に上陸
	6月24日	政府軍、棚倉城を落とす
	7月1日	鎮撫総督九条道孝、秋田に入る 秋田藩同盟離脱
	7月2日	輪王寺宮、仙台城下の仙岳院に入る
	7月14日	白石城内に軍議所が設けられる(奥羽越公義府)
	7月29日	政府軍、二本松城、長岡城、新潟港を落とす
	8月11日	駒ヶ嶺で仙台藩兵と政府軍が戦闘
	8月23日	政府軍、若松城下へ侵攻
	8月26日	榎本武揚率いる旧幕府艦隊、松島湾に入る
	8月28日	米沢藩、降伏を申し入れる
	9月15日	仙台藩、降伏を申し入れる
	9月22日	会津藩降伏
	9月23日	庄内藩、降伏を申し入れる
	9月24日	盛岡藩、降伏を申し入れる
	10月6日	仙台追討総督四条隆謨、仙台城に入る
	12月7日	伊達慶邦・宗敦、東京での謹慎を命じられる
	12月7日	伊達家の家名存続、28万石下賜が決定
	12月12日	伊達亀三郎を藩主として、新封仙台藩が成立

古文書・文書記録の保全について

地域に残された古文書・文書記録などの所在をご存じの方
・先祖から受け継いできた古文書・文書記録の保存にお困りの方
ぜひ下記までご連絡ください

NP0法人宮城歴史資料保全ネットワーク

980-8572 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉468-1
東北大学災害科学国際研究所 歴史資料保存研究分野気付
022-752-2143